

出雲大社の法華経

米田 宣雄

年のはじめの例^{なほ}しとて 終わりになき世のめでたさを

と歌う、お正月一月一日の唄は第八十代出雲国造・出雲大社宮司の作詞です。

八岐大蛇退治は出雲斐伊川上流を舞台に年老いた父母と娘を助けるスサノオノミコトの姿を勇壮に描いています。

令和元年五月一日の「承継の儀」やこのたびの「即位の礼」に於いて厳かに式場に運びこまれた箱。その中の長い箱には三種の神器のひとつ、あのスサノオが大蛇を退治した際、体内に発見した「天叢雲劍・草薙の劍」が納められていたはずで

大きな袋を肩にかけ 大黒さまが来かかると

いじ悪な兄さん神々によって丸はだかにされた因幡の白うさぎを助けたのはこころ優しき弟オオクニヌシノミコトでした。今は出雲大社の祭神、また縁むすびの神として、多くの人を引きつけています。

六十年に一度を原則として遷宮をくり返す出雲大社は平成二十五年のそれ以来、参拝者が飛躍的に伸び、今年年間六〇〇万人が訪れる場所となっています。

しかし、この大社が戦国時代から江戸初期にかけて仏教色に染まる、その事を知る人は少ないのです。では、いつ何のために、そのような姿になったのでしょうか。

ここまでのお話は古事記に記された神話です。これからは『出雲国風土記』に残されているお話です。

風土記は古事記・日本書紀に続いて奈良時代前半に編纂されたもので、全国六十の国で作成されその中で五ヶ所がかるうじて残り、そのうちほぼ完全な形で残っているのが出雲国風土記です。そして、地元に親しまれている「国引き神話」がその中に記されています。

その内容は古代の神さまヤツカミツオミツノが小さく作ってしまった出雲国を他国から土地を引き寄せ縫い合せて大きな国にする話で新羅の余った土地を鋤で取り分け隠岐島や能登半島の一部のそれらすべてに綱をかけ「国来・国来」と引いて合体させた場所が島根半島になった、という話です。

この内容は古代すでに、日本海を通じた交流が盛んであったことを示しています。しかし、本日の主題に必要なのはこの古代の話より中世に弘まっていたもう一つの「国引き神話」なのです。なぜならば、同じ名前の神話でもその内容は、全く異なるものだからです。

中世（平安末から戦国時代）のもう一つの「国引き神話」は次のような内容だったのです。

昔、インドに霊鷲山という山があった。その山の一角が崩れて海へ流れ出た。やがて、その山塊は日本近くに到りそれをスサノオが杵で築き固めた。これが「浮浪山」と呼ばれる現在の島根半島であり「杵築」の名の由縁である。

というものだったのです。古代では神が鋤で土地を取り分け綱をかけ引き寄せ縫い合せたのに対し中世では流れ着いた霊鷲山の一部をスサノオが杵で固めたのです。

出雲大社は杵築大社とも呼ばれているそのいわれは、ここにありません。

そして、この神話が初めて資料上に現れるのは鰐淵寺というお寺に所蔵されている点にも注目です。鰐淵寺は古くから山岳信仰で盛えた山で、奈良時代には鰐淵山と呼ばれていました。しかしこの神話以来、浮浪山鰐淵寺と転換した山陰屈指の古刹天台宗寺院です。

出雲大社からも十キロほどの近距離にある島根半島の中心に建立されたこの寺院は平安末期には「出雲國中第一の伽藍」と称されるのです。かたや中世出雲大社は霊鷲山と縁を結ぶことでスサノオを新たな創造神として、発展させ大社の祭神とするのです。

大和に国を譲り、あたかも幽閉されたかのように見えるオオクニヌシより、アマテラスの弟であり地元根付いた大蛇を退治したスーパヒーロー・スサノオは民衆が望む古くて新しい神として再び脚光を浴びるのです。

そして、大社は「出雲の国第一の霊神・一の宮」とも称され「第一の伽藍」とともに両者は対応しながら時と一体となって、権威を高めあつていくのです。

このような中世の国引き神話は三百年もの間出雲国内外で語り続けられます。そして、両者は神仏を隔離しながら不即不離・表裏一体を保つていく。従つて大社境内には仏教施設は全く存在しなかつたのです。

その姿を大きく変えるのは戦国時代、領主争いが続くなか、その力を発揮した尼子氏の力によるものなのです。権力を握つた尼子経久あまごつねひさの代表的な行爲を二つあげますと、一五二七年に大社境内に三重塔を建立。また千百人の僧侶を集め、十二日間で一万部の法華経を誦する行事を一五二二年から一五三〇年の八年間に三度実行しています。

ここに、大社は尼子氏一族の繁栄を祈る場所となり、同時に新たな支配者となつたことを国内外に標榜する舞台ともなつたのです。

しかし、その姿や政治体制は江戸初期に再び大きな変化を見せます。それは、毛利氏の前に尼子が降伏したことを発端とします。

支配者が変わり太閤検知も実施され、寛文年間一六六一年から造宮遷宮をきっかけとして、仏教施設の撤去が行われました。あの三重塔もご神木調達のため、但馬国兵庫たしまあき県北部の妙見山に移築されました。

このように、一般的な大社での寺院的景観は一掃され一六六七年に完全に「中世神話」の世界は終りを迎えます。

さて、それから三百五十年を経た二〇一六―一七年度において、出雲大社境内遺跡発掘調査が行なわれました。そして、初めて「一字一石経」が出土しその石に書写された経典は法華経が圧倒的に多いことが報告されました。

三重塔を失い仏教色が消えてしまっても、自主的に懸命に法華経信仰の道を歩んでいた人達がいたのです。なぜならば戦乱の時代から続く多くの混乱の中を生き抜くためには、どうしてもその信仰の力が必要だったからです。

では、戦乱以外の二つの「中世の乱」を見てみましょう。その一つが災害・干ばつ・飢饉です。それは連続し長期化し規模を大きくしていきますが、大社から近い所をあげれば石見銀山で起きた山津波では、千三百人を超える人が命を落としています。また大陀神話の斐伊川は戦国末期から五十年ほどの間に九度の氾濫を繰り返し（一六三〇年から十年の間には四回）大社近くの日本海への流れをほぼ真東の宍道湖に向きを変えています。この時代には連鎖し日常化する「国土の乱れ」がありました。

次に民衆の様子を大社門前町を通して見てみましょう。その場所は大社参詣者をもてなす場所であり、仏教行事に参加する人を迎え入れる場所でもありました。このにぎわいの場所は同時に、山陰屈指の商業都市となっていくきました。そして、陸路だけでなく日本海にごく近い場所にある大社は、航路発達とともに物資供給基地となり商人がひしめいていました。加えて十六世紀後半石見銀山は「シルバーラッシュ」とも言える現象を見せ、巨大都市を誕生させました。

さまざま人や物が出雲を往来するようになっていた一五五八年、ついに尼子氏は杵築門前町に対し二十五ヶ条にも及ぶ法度を発令します。その条文は参詣者の宿泊に関する件、同じ宿に泊まること、宿泊者を争奪しないことに始まり紛議・紛争に関する罰則規定が細かく定められています。

即ち出雲大社の門前は「秩序の乱れ」も日常化していたのです。そして、それは同時に混乱・混迷の中を必死に生きる中世人の姿でもあったのです。

中世の「もう一つの国引き神話」は戦国時代に入り、時の為政者によって、大きな役割を得て出雲大社自体を仏教色に染めます。

時は流れ、江戸時代に入ると新たな支配者と制度によって大社は仏教を排除します。

このような変化は大きな上からの力で一気に起きるように見えますが社会全体の本質、即ちそこに生き続ける人々の心や生活は一朝一夕に変わるものではありませんでした。

出雲の民衆もそうでした。たとえ三重塔を失っても混沌の中を苦悩するだけでない信仰による力強い生命力を持っていたのです。

その力の源は何事にも屈服しない地元密着のスーパーヒーロー・スサノオの存在でありグローバルで何事にもどんな命にも慈悲深き人であれと教える法華経にあったのです。

「グローバル」などという意味は知らずともその時、その人々は実行していたのです。三重塔の近くに流れる川できれいな石を見つけては法華経の一字を書き大きめの広たい石を見つけては日蓮宗のお題目を刻んだのです。

小湊、身延そして、ここ池上からも遠く離れた出雲で懸命に生きていた人達の姿は令和を生きる私達に大切なことを伝えようとしています。

混乱・混乱から共生・安穩という「世界がぜんたいしあわせ」になるためには「四表の静謐」を掲げる法華経の研鑽と布教にかかっていると、このたび改めて強く感じました。

十月は出雲は神在月です。特別なこの時に貴重な機会を与えていただきました関係者の皆様そして、ご聴聞いただきました皆様に深く感謝申し上げます。

〔参考文献〕

- 『もう一つの出雲神話』 出雲弥生の森博物館
- 『出雲の謎大全』 瀧音能之
- 『中世出雲と国家的支配』 佐伯徳哉
- 『中世寺院と民衆』 井原今朝男
- 『古代出雲の巨塔の謎』 祖田浩一
- 『かみは出会って発展する』 加藤みち子
- 『出雲鰐淵寺文書』 鰐淵寺文書研究会編
- 『今・出雲がおもしろい』 藤岡大拙
- 『出雲大社』 千家尊純
- 『出雲大社門前町の発展と住人の生活』 公益財団法人いづも財団（編）、出雲大社御遷宮奉賛会